

ダニエル書 - 第104号

預言の原則を解き明かす：終末における調査審判と執行審判を理解する

Jeff Pippenger

2024-02-29

私たちは、ロナルド・レーガンとローマ教皇との秘密の同盟によってソビエト連邦が一掃された1989年という「終わりの時」に、ダニエル書11章の最後の六節の封印を解く御業の中でユダ族の獅子によって示された預言の原則を確立している。私たちは、ローマの三重適用とバビロンの陥落が、黙示録17章において、女と、彼女が乗りその上に君臨する獣を指し示していることを示してきた。

第十七章と第十八章における女と獣の描写は、間もなく来る日曜法から、ミカエルが立ち上がり恵みの時が閉じるまで続く、神が現代のバビロンに下される段階的な裁きを示している。その期間は、神の憐れみが混じった形で行われる神の執行審判の前半を画する。その後の最後の七つの災いにおいては、もはや憐れみはその裁きに混じらない。この二つの段階は、1844年10月22日に始まった調査審判においても見て取れる。調査審判は死者の調査と審判から始まり、2001年9月11日に生者に対する調査審判が始まった。

生ける者の審判もまた二つの期間に分かれており、第一の期間は2001年9月11日に始まり、十四万四千人の一員となる候補とされている者たちに対する調査と審判から始まる。これは、裁きは神の家から始まるからである。死者の調査審判は、彼らの生涯のある時点で命の書に名が記されていた者に対してのみ行われた。命の書に記され、登録されていた死者の名は、その後、罪の書と照合された。告白されていない罪があれば、その名は命の書から抹消された。生ける者の調査審判については、裁きは神の家から始まるという限定が設けられているが、死者の調査審判にはそのような限定は必要なかった。

生ける者の調査審判において、神の言葉は、十四万四千人の封印の時に行われるその審判が、神の教会であるエルサレムで始まったことを明確に示している。聖書はこの事実について第二の直接の証言を与えている。

さばきが神の家から始まらなければならない時が来ています。もしそれがまず私たちから始まるのなら、神の福音に従わない者たちの終わりはどうなるのでしょうか。第一ペテロ 4:17

生ける者の裁きは、神の家であるエルサレムから始まり、その裁きが始まる定められた時がある。生ける者の裁きは、書記の墨壺を帯びた者がエルサレムを行き巡り、教会で、また地でも行われている忌むべきことのために嘆き叫ぶ男たちと女たちにしるしを付けるとき、エルサレムで始まる。

福音に従わない人々の一群は、黙示録第7章において十四万四千人と対比される形で示され、そこでヨハネは彼らを「大群衆」と特定している。大群衆は、生ける者の審判の期間に審判される生ける魂の一群を表しており、彼らは神の律法に完全には従ってこなかった。というのも、彼らは教皇の太陽の日に礼拝してきたからである。やがてアメリカ合衆

国に日曜法が到来するとき、エゼキエル書第9章の書記の墨壺を携えた天使によって封印された者たち（これは黙示録第7章の封印でもある）は、旗印として高く掲げられる。そのとき、現在福音に従っていない者たちは、第七日安息日に対して責任を問われることになる。

しかし過去の世代のクリスチャンたちは、そうすることで聖書の安息日を守っているのだと思い込み、日曜日を守っていた。また今日でも、ローマ・カトリック教会をも例外とせず、どの教会にも、日曜日が神による制定の安息日であると誠実に信じている真のキリスト者がある。神は、彼らの志の誠実さと御前における正直さを受け入れておられる。だが、日曜遵守が法律で強制され、真の安息日の義務について世界が啓発されるときには、ローマの権威を超える権威を持たない掟に従うために神の戒めに背く者は、そのことによって神よりも教皇制を崇めることになる。彼はローマと、ローマが制定した制度を強制する権力に服従し、これを崇敬している。彼は獣とその像を礼拝している。そのとき、人々が神がご自身の権威のしるしであると宣言された制度を退け、その代わりにローマがその至上性のしるしとして選んだものを重んずるなら、彼らはその結果、ローマへの忠誠のしるし-「獣の刻印」-を受け入れることになる。そして、このように問題が人々の前に明白に示され、彼らが神の戒めと人間の戒めのいずれを選ぶかに迫られるに至って初めて、なおも背きを続ける者たちは「獣の刻印」を受けるのである。『大いなる論争』449頁。

印を押された者たちの旗印は、福音に従わない者たちを従順へと招くものである。

その日、エッサイの根が民のための旗印として立ち、異邦人はそれを求め、その安息は栄光に輝く。その日、主は再び、二度目に御手を伸ばして、アッシリア、エジプト、パトロス、クシュ、エラム、シヌアル、ハマテ、そして海の島々から、残されているご自分の民の残りの者を取り戻される。主は諸国のために旗印を掲げ、イスラエルの追い散らされた者を集め、地の四隅からユダの散らされた者を集められる。イザヤ書 11:10-12。

現在福音に従っていない者たちは、生きているうちに裁かれる。しかし彼らの裁きは、生きている十四万四千人に対する調査審判の後になされなければならない。というのは、彼らは、間もなく到来する日曜法の危機のさなかに、神の印を持つ男女を見ることによってしか警告を受けることができないからである。

聖霊の働きは、世に罪と義と裁きとを悟らせることである。世が警告を受けることができるのは、真理を信じる者たちが真理によって聖められ、崇高で聖なる原則に従って行動し、神の戒めを守る者とそれを足で踏みにじる者との間の境界線を、高尚な意味において示しているのを見ることによるのみである。聖霊による聖化は、神の印を持つ者と、偽りの安息日を守る者との違いを明確にする。試練が来るとき、獣の刻印が何であるかがはっきり示される。それは日曜日を守ることである。真理を聞いた後でもなおこの日を聖なるものと見なして守り続ける者は、時と律法を変えようと考えた罪の人の印を帯びている。聖書訓練学校、1903年12月1日。

第三のエリヤの働きが成し遂げられる場である執行審判は、間もなく来る日曜法の時に始まる。それには二つの期間があり、第一の期間では、今は福音に従わない者たちに対して、神の裁きには憐れみが加えられている。そしてその後、憐れみなく注がれる最後の七

つの災いが続く。

猶予の時は、もはや長くは続かない。今や、神は地上からその抑えの御手を引かれつつある。久しく、神はその聖霊の働きを通して人々に語りかけてこられた。しかし彼らはその呼びかけに耳を傾けなかった。今、神はその裁きによって、ご自身の民にも世にも語っておられる。この裁きの時は、何が真理であるかを学ぶ機会をまだ持たなかった者たちにとっての憐れみの時である。主はいつくしみ深く彼らを顧みられる。主の憐れみの御心は動かされ、救うための御手はなお差し伸べられている。この終わりの時代に初めて真理を聞く多くの人々が、安全の囲いへと受け入れられるだろう。Review and Herald, 1906年11月22日。

福音に従わない者たちは、イエスが彼らを呼ぶと約束した「ほかの羊」であり、彼が呼ぶとき、彼らは彼の声を聞く。

また、わたしには、この囲いに属していないほかの羊たちもいる。彼らもわたしが連れてこなければならない。彼らはわたしの声を聞く。そして、ひとつの群れ、ひとりの羊飼いとなる。ヨハネによる福音書 10:16。

彼らが聞く「声」は、黙示録第十八章の第二の「声」であり、彼女が猶予期間の罪の杯を満たしたために大淫婦への裁きが倍にされる、間もなく来る日曜法のとときに大声で叫ぶ。

預言者は言う。「私はもう一人の天使が天から降りてくるのを見た。大いなる権威を携え、その栄光によって地は照らされた。そして彼は力強い大声で叫んだ、『大バビロンは倒れた、倒れた。悪霊の住みかとなった』」（黙示録 18:1, 2）。これは第二の天使によって与えられたのと同じメッセージである。バビロンが倒れたのは、「彼女がその淫行の怒りのぶどう酒をすべての国々に飲ませたからである」（黙示録 14:8）。そのぶどう酒とは何か——彼女の偽りの教義である。彼女は第四戒の安息日の代わりに偽りの安息日を世に与え、また、エデンでサタンが最初にエバに語った虚偽——魂の自然不死——を繰り返してきた。これに類する多くの誤りを彼女は広く広め、「人間の命令を教義として教えている」（マタイ 15:9）。

イエスが公の宣教を始められたとき、神殿を冒瀆による汚れから清められた。宣教の働きの最後の行為の一つは、神殿の二度目の清めであった。同様に、世に警告を与える最後の働きにおいて、教会に対して二つの明確な呼びかけがなされる。第二の天使のメッセージはこうである。「倒れた、倒れた、大いなる都バビロンは、彼女はその姦淫の怒りのぶどう酒を諸国の民に飲ませたからである」（ヨハネの黙示録14章8節）。そして第三の天使のメッセージの大いなる叫びの中で、天からこう言う声が聞こえる。「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずからず、その災いを受けないために。彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を覚えておられるからである」（黙示録18章4、5節）。『セレクトッド・メッセージズ』第2巻、118頁。

米国でまもなく制定される日曜法のと、現代のバビロンに対する漸進的な執行審判が開始し、二つの審判が重なり合う中で、生ける者の審判の最後の期間が始まる。契約の使者の働きのために道を備える第三の使者は、2001年9月11日に始まり、いま福音に従っていない者たちの最後の一人が黙示録18章の第二の声を聞いてバビロンから出て来るとき

に終わる、生ける者の審判の期間における働きを表している。その働きは、道を備える使者の務めの初めにおける十四万四千人の神殿の清めと肅清を示し、そして、契約の使者のために道を備える使者の務めの終わりにおける大群衆の神殿の肅清と清めを示している。

間もなく到来する日曜法るとき、ペンテコステで起こった神の力の顕現が繰り返される。

私たちの品性に一つでも汚点やしみがある限り、私たちのうち誰ひとりとして神の印を受けることはない。私たちの品性の欠陥を正し、魂の宮をあらゆる汚れから清めることは、私たち自身に委ねられている。そのとき、後の雨は、ペンテコステの日に初めの雨が弟子たちに降ったように、私たちの上に降る。……

「兄弟たちよ、あなたがたはこの大いなる準備の業において何をしているのか。世と結びついている者たちは、世俗の型を受け、獣の刻印のために備えている。自己を信頼せず、神の前にへりくだり、真理に従うことによって魂を清めている者たちは、天の型を受け、額に神の印を受ける備えをしている。布告が発せられ、印が押されるとき、彼らの品性は永遠に純潔で汚れのないままに保たれる。」『証言』第5巻、214、216頁。

ここで、預言の言葉に一見矛盾があるかのように見えてつまづいてしまうかもしれないが、そうする必要はない。弟子たちの時代のペンテコステにおいて力を与えられたメッセージは、異邦人には伝えられなかった。異邦人とは、間もなく来る日曜法の時に福音に従わない者たちのことである。ペンテコステで力を与えられたそのメッセージは古代イスラエルに伝えられ、彼らはさらに三年半のあいだ、なお最後の猶予期間にあった。

あなたの民とあなたの聖なる都について、背きを終わらせ、罪に終止符を打ち、咎に対する贖いを成し遂げ、永遠の義をもたらし、幻と預言を封印し、至聖所に油を注ぐために、七十週が定められている。ダニエル書 9:24

ペンテコステで力を受けたメッセージは、福音に従わない者たちには、西暦34年にステパノが石打ちにされるまで伝えられることはなかった。ホワイト夫人はしばしばこの事実を指摘している。

すると天使は言った。「彼は一週〔七年〕のあいだ、多くの者と契約を確かなものとする。」救い主がその宣教を始めてからの七年間、福音はとくにユダヤ人に宣べ伝えられることになっていた。最初の三年半はキリストご自身によって、その後は使徒たちによって。「その週の半ばに、彼はいけにえと供え物をやめさせる。」ダニエル書 9:27。紀元31年の春、まことのいけにえであるキリストがカルバリーでささげられた。そのとき、神殿の垂れ幕が真っ二つに裂け、いけにえの儀式の神聖さと意義が失われたことが示された。地上のいけにえと供え物が終わるべき時が来たのである。

その一週-七年-は西暦34年に終わった。そして、ステパノの石打ちによって、ユダヤ人はついに福音の拒絶を確定させた。迫害によって各地に散らされた弟子たちは、「至る所で御言葉を宣べ伝えた」（使徒行伝 8:4）。そしてほどなくして、迫害者パウロは回心し、異邦人への使徒パウロとなった。The Desire of Ages, 233.

キリストの復活から五十日後のペンテコステで力づけられたそのメッセージは、福音がキリストのもう一つの群れをバビロンから呼び出すことになる日曜法と符合している。ところが、十字架の後三年半が過ぎるまでは、ユダヤ人が「福音の拒否に判を押す」ことはなく、その後になってメッセージは異邦人、すなわち当時福音に従っていなかった人々のもとへ伝えられた。紀元34年にユダヤ人が福音の拒否を確定させたとする見解によって、この見かけ上の矛盾はあっという間に大きくなる。というのも、ホワイ夫人はそれとは異なると述べているからである。

祭儀制度全体はキリストを象徴していたので、キリストから離れては価値がなかった。ユダヤ人がキリストを死に引き渡すことによってキリストの拒絶を確定させたとき、彼らは神殿とその奉仕に意味を与えていたすべてのものを退けた。神聖さは去っていた。それは滅びに定められていた。その日以来、いけにえのささげ物とそれに伴う奉仕は無意味となった。カインのささげ物のように、それらは救い主への信仰を表してはいなかった。キリストを死に至らしめることで、ユダヤ人は事実上、自分たちの神殿を破壊したのである。キリストが十字架につけられたとき、神殿の内側の垂れ幕は上から下まで真っ二つに裂けた。これは、偉大な最後の犠牲がささげられ、いけにえの制度が永遠に終わったことを示していた。『The Desire of Ages』165ページ。

ユダヤ人は、ステパノの石打ちのときに、あるいはキリストの十字架のときに、福音の拒絶を最終的に確定させたのだろうか？ この見かけ上の矛盾は、ペンテコステにおける神の力の現れを、まもなく来る日曜法と同一視することに関して生じる見かけ上の矛盾と関連している。

見かけ上の矛盾は次回の記事で整理するつもりだが、この特別な考察の目的が、終わりの時代において神のラオデキヤの民は裁きを理解していないと預言者たちが指摘している事実に基づいていることを、改めて確認しておきたい。私たちは、調査審判と執行審判がまもなく制定される日曜法においてどのように交わるのかを明確にするために、裁きのさまざまな時期と目的を振り返ってきた。いま提起した見かけ上の矛盾に伴う啓示を見いだすためには、これらの要素を検討し直す必要があったのである。

次回の記事でこの研究を続けます。

ローマ・カトリック教徒は、安息日の変更が自分たちの教会によって行われたことを認め、まさにこの変更を教会の至上権威の証拠として挙げる。彼らは、週の第一日を安息日として守ることによって、プロテスタントは教会が神的な事柄における立法権を有していることを認めているのだと宣言する。ローマ教会は自らの無謬性の主張を放棄しておらず、世界とプロテスタント諸教会がローマ教会の作り出した偽りの安息日を受け入れる一方でエホバの安息日を退けると、彼らは事実上この主張を認めているのである。彼らはこの変更の権威を引き合いに出すかもしれないが、その論法の誤謬は容易に見抜ける。教皇派は、プロテスタントがみずからを欺き、この件の事実に進んで目をつむっていることを見抜くほどに鋭い。日曜制度が支持を得るにつれて、彼は喜び、やがてそれがプロテスタント世界全体をローマの旗の下に置くことになると確信する。

安息日の変更は、ローマ教会の権威のしるし（印）である。第四戒の要求を理解しながら、真の安息日の代わりに偽りの安息日を守ることを選ぶ者は、そうすることによ

って、それを命じている唯一の権威に服従を表明していることになる。獣の刻印とは教皇制の安息日であり、それは神の定めた日に代えて世界に受け入れられてきたものである。

しかし、預言で定められている獣の刻印を受ける時は、まだ来ていない。試練の時も、まだ来ていない。ローマ・カトリック教会も例外ではなく、あらゆる教会に真のクリスチャンがいる。光を受け、第四の戒めに従うべき義務を悟るまでは、だれも罪に定められない。だが、偽りの安息日を強制する布告が発せられ、第三天使の大いなる叫びが獣とその像の礼拝に対して人々に警告するとき、偽りと真理の間にはっきりと一線が引かれる。その時、なおも背きを続ける者たちは、額か手に獣の刻印を受ける。

私たちは急速な歩みでこの時期に近づきつつある。プロテスタント諸教会が、彼らの先祖がその反対のゆえに最も激しい迫害に耐えた偽りの宗教を支えるため、世俗の権力と結びつくとき、教会と国家の連合した権威によって教皇制の安息日が強制されるであろう。国家的な背教が起こり、それは国家的破滅にしか終わらない。バイブル・トレーニング・スクール、1913年2月2日。